

昔むかし、遠い国の王さまに、若いお医者が出ました。お医者はよい人だったので、王さまに気に入られていました。ある日、王さまは、お医者に「妻を見つけて来るように」といって、旅に出しました。

お医者は、見知らぬ町に着きました。そして、教会堂に行つて、教主さまに、「金持ちでも貧しくてもいいから、町じゅうの娘を集めてくれませんか。わたしの出す問題に答えることのできるかしこい娘と、結婚しようと思います」といいました。

町じゅうの娘が集められました。けれども、お医者の方に答えられる娘はひとりいませんでした。

ある金持ちの家に、貧しい娘が働いていました。娘は、ご主人からみずばらしい服をもらつて、お医者の方にやつて来ました。お医者はたずねました。

『はい』というのはどういう意味は何かね。『いいえ』というのはどういう意味かね』

『はい』というのは、自分が生まれたことを知っているということです。『いいえ』というのは、自分がいつ死ぬか分からないということです』

お医者はこの答えが気に入ったので、その娘と結婚しました。

お医者は、国に帰ると、妻に大きな宝石のついた指輪を渡していました。

「わたしは、王さまの宮殿で働かなくてはならないから、月に二度しか家に帰つて来られない。この宝石が光っているあいだは、無事に働いているが、宝石がくもってきたら、わたしの命が危ないと思つておくれ」

ひとりの大臣が、王さまがお医者様を特別大切にしているのを、ねたんでいました。そこで、あるとき、大臣は、王さまにこんなことをいいました。

「あのお医者は、結婚したけれど、妻をだれにも見せず、屋敷の奥に閉じこめています。

何かわけがあるにちがいありません。わたしは、そのすがたを見てやろうと思つております」

王さまは、

「では、やつてみよう。これからひと月の間に、おまえが、医者の妻を見たら、医者は死なねばならない。もし見られなかったら、おまえが死なねばならない」といいました。

大臣は、あれこれやつてみましたが、うまくいきません。ところが、ある日、大臣は、町で、年寄りの魔女に会いました。そこで、

「おまえ、お医者様の屋敷に行つて、お医者様の妻を見て来てくれないか。そして、何か、体の目じるしになる物を教えてくれ。お金はたんまりやるぞ」といいました。

魔女は、ガラスの器を持つて、お医者様の屋敷にやつて来ました。その日は雨もようで、道がぬかるんでいました。魔女は、屋敷の入り口の前で、わざと転びました。ガラスの器が、こなごなに割れました。魔女はわあわあ泣きました。屋敷の人たちが、おどろいて出て来ました。魔女は、

「お願いです。家の中に入れてくださいな。外は暗いし、このとおり、ずぶぬれです」といいました。

お医者の方は、魔女を屋敷の中に案内して、いっしょにお風呂に入って、体を洗ってやりました。そのとき、魔女は、妻の背中にほくらがひとつあるを見つけました。つぎの朝、屋敷の者たちが起きた時には、魔女は消えていました。

まもなく、お医者の方は、指輪の宝石がくもっているのに気がきました。急いで、町の様子を見に行くと、町の人たちは、

「お医者さんが死刑をいわたされたそうだ。なんでも、大臣がうまくお医者さんの妻を見たんだそうだ」と、うわさしていました。

妻は、たくさんのお金（きん）を持って、金細工師の所につけました。そして、ダイヤモンドをちりばめたお金のスリッパを片方作りました。

つぎの日、お医者の方は、屋敷の侍女たちに男の服を着せて馬に乗せました。そして、みんなで馬を走らせて、自分はその真ん中を走り、お医者さんが処刑される広場につけました。王さまはそれを見て驚き、

「あれは何だ」といいました。お医者の方は進み出ていいました。

「わたしは、医者の方でございます。たしかに、大臣は、わたしの所に来られ、わたしの金のスリッパを片方、ぬすんで行われました」

そして、王さまに、片方の金のスリッパを見せました。王さまは、あきれて、大臣に、

「おまえ、スリッパをぬすんだのはほんとうか」とききました。大臣は、びっくりぎょうてんしました。

「いえ、スリッパなどぬすんでおりません。だいいち、わたしは、お医者さんの屋敷に行っておりません。魔女から話を聞いただけでございます」

そこで、お医者さんの代わりに、大臣が首をはねられましたとき。

原話…『世界の民話18 イスラエル』小川超訳／ぎょうせい

再話…村上郁